

◎日 時：平成14年 2月22日（金） 14：00～16：30

◎場 所：国立民族学博物館 梅棹資料室

◎出席者：国立民族学博物館 梅棹忠夫 顧問
国土技術政策総合研究所 中島威夫 企画部長
西川和廣 評価研究官
吉本俊裕 国土マネジメント研究官
金子正洋 建設経済研究室主任研究官

◎内 容：

はじめに

○国土技術政策総合研究所（以下、「国総研」と略記する）

ー 本日は、梅棹先生には、貴重な時間をとっていただき本当にありがとうございます。最初に、今日、梅棹先生のところに、お話を伺いにおじゃましました主旨を簡単にご説明させていただきます。

私ども、国土技術政策総合研究所（以下、「国総研」という）は、国土交通省の研究機関でございまして、平成13年の4月に、土木研究所、建築研究所及び港湾技術研究所の技術政策研究部門が再編され、新たに発足しました。私どもの研究所は、住宅・社会資本のエンドユーザーである国民一人一人の満足度を高めるために、技術政策の企画立案に役立つ研究を実施することといたしております。

具体的には、これからの美しい国土づくりをどう進めるのか、豊かでゆとりのある生活環境をどう創り上げていくのか、そして、これを進めるうえで必要となる社会資本整備をどのように評価しながら進めるのか、というような観点から研究することとしています。その中で、今後の社会資本のあり方を考えるとき、社会資本がどのように使われ、どのように社会と関わるのかが大変重要だと思っています。私どもは、社会資本を考えるうえでの「縦軸＝歴史的な視点」、「横軸＝空間的、国際的な視点」としてありますが、「国土形成史を踏まえた今後の国土マネジメント」というテーマを技術政策課題の一つとしてとりあげ（図－1）ております。

そこで、まず、これまでの、国土形成過程や社会資本整備について、調べてみようということになりました。そのときに、先生が書かれました『近代世界における日本文明』（梅棹忠夫著、中央公論新社、2001年）をみんなで読みまして、その中に、われわれが言いたいことがたくさん散りばめられていました。

まず、文明というのは、社会システムを支える装置系と制度系、装置群と制度群からできており、その装置群というのは、律令の時代から営々と積み上げられ、そのもとに現代社会があるんだと言われております。このことから考えると、昨今、整備の途上にある高速道路について、もうそろそろいいじゃないか、みんな満足しているんだから、この辺でやめちゃおうよといった議論がなされ、全然変な方向に議論が進んでいるんですが、そうではなくて、高速道路14,000kmこれが文明を支える装置群としてどうなのかといったようなことを真剣に考え議論する必要があるのではないかというふうに思ったわけです。

先生の本の中にも、これからの文明を考える上では、例えば道路という交通のネットワークは、文明を支える壮大な装置群であるから、これを抜きにして語れないというようなお話があったり、それから、私どもも、律令以来の道路がどうだったかというようなことも、これまでに勉強してきたので

重点的に取り組む研究課題

重点的な研究課題は、以下の7本の柱と16の技術政策課題に基づいて設定します。

1. 持続可能な社会を支える美しい国土の形成

- ① 国土形成史を踏まえた今後の国土マネジメント
- ② 地球環境への負荷の軽減
- ③ 住宅・社会資本のストックマネジメント
- ④ 良好な環境の保全と創造

2. 安全で安心な国土づくり

- ⑤ 災害に対して安全な国土
- ⑥ 安心して暮らせる生活環境

3. 豊かでゆとりのある暮らしの実現

- ⑦ 快適で潤いのある生活環境の形成
- ⑧ 住民参加型の地域マネジメント
- ⑨ 豊かでゆとりのある住宅等の市場基盤の整備

4. 活力ある社会、個性ある地域の創造

- ⑩ 人の交流の円滑化と物流の効率化
- ⑪ 都市・地域の活力の再生

5. 住宅・社会資本整備マネジメント手法の向上

- ⑫ 技術基準・契約方式等の高度化
- ⑬ 政策及び事業評価手法の高度化

6. 高度情報化社会に対応した国土づくり

- ⑭ ITの活用による活力ある社会の構築

7. 国際社会への対応と貢献

- ⑮ 国際貢献の推進
- ⑯ 国際基準への戦略的対応

図－1 国土技術政策総合研究所 7本の柱と16の技術政策課題

すけれども、その中で、道路といった装置群の整備において、そこには総合技術者集団というのがどうもいたみたいだというようなことが書いてありました。

○梅棹

―― そうですね。いたようですね。土木建築家集団は明らかにあった。それははっきりしている。そして、石工などもあったのです。いわゆる技術者集団がいました。

○国総研

―― われわれ国総研の研究者というものは何だろうとよく考えてみたら、大きくいえば文明、また、それを構成する装置群、それらを支える組織、技術者集団と考えられるのかなと思いはじめまして、これはもう、是非、一度先生にお会いして、直にご指導いただいて、これからの研究に役立てていこうかなというふうに思って、きょうは伺ったわけでございます。

○梅棹

―― なるほど、そうかもしれません。私は長い間、文明論を専門にしているんですけども、これはまさにみなさまがたの研究所で取り上げていただくのにふさわしいテーマかもしれませんな。

○国総研

―― それでは、私ども、先生の本を読ませていただいておりますので、先生に質問させていただくという形で進めさせていただいてよろしゅうございますでしょうか。

○梅棹

―― 結構でございます。

1. 日本と西欧は似たような条件下で文明が発達した

（1）日本文明は西欧文明と同質的である

○国総研

―― 先生は著書の中で、文明とは、装置群と制度群を含んだ生活システムの全体であるとおっしゃっています。また、近代文明という点で西ヨーロッパと日本が大変似ているとおっしゃっています。そのあたりから、お話しいただけませんでしょうか。

○梅棹

―― 私はアジアの国をずいぶん歩きましたし、ヨーロッパもかなりまわりましたが、見れば見るほど、今言われたような確信が固まってきました。日本と比べられるのは西ヨーロッパです。アジアとは違います。私は、日本はアジアではないということを言うているんです。日本がアジアだなんて一体誰がそんなことを決めたんですか。おたくは、アジアに入りますかといって、相談を受けたことは一遍もない。誰かが勝手に決めたことです。歴史的にも 13 世紀以来、日本とアジアは全然別の道をたどっているわけですからね。中国と一体化して見られるわけがありません。

（2）遊牧民族の占領と文明

○国総研

―― 日本と西ヨーロッパは離れていますよね。そういうところで、地理的に近いアジアと似たような文明ではなくて、日本はヨーロッパと似たような文明ができたというのは、不思議ですね。

○梅棹

―― なぜ、そういうことになったのかといえば、私も説明原理は持っています。アフリカのサハラ砂漠、リビア砂漠。そしてゴビ砂漠と、南西から北東にユーラシア大陸を斜めに大乾燥地帯が走っています。東シベリアは砂漠じゃないのですが、かなり乾燥しています。実はこの乾燥地帯から遊牧民による侵略が繰り返しておこるんです。一番最後は、13 世紀のモンゴル帝国です。中国は、周の時代から遊牧民に何遍でもやられるんです。

少し農耕が発達して、文明ができてきたなと思うと、遊牧民にやられて全部引っ繰り返される。インドもそうなんです。東ヨーロッパもそうなんです。何遍でもやられている。根本的に引っ繰り返る。ところが、西ヨーロッパと日本は、この大乾燥地帯から大分離れているんです。そこまで遊牧民の手が伸びないんです。両方とも遊牧民の侵略の手がとどいたのが 13 世紀です。モンゴル帝国が一番大きくなったときです。

それが両方とも食い止められた。だから、日本と西ヨーロッパとは、暴風雨圏から外れておった。これは温室地帯だというわけです。それで、すすくと内部的な変革の積み重ねで文明が成長した。その結果、封建制が成立したというわけです。

○国総研

―― 「文明の生態史観」で拝見しました。

(図-2 ユーラシア大陸の模式図 (梅棹忠夫著『文明の生態史観』中央公論新社より))

○梅棹

―― それですよ。ユーラシアの両端の温室地帯に中世の文明が温存された。助かったというわけです。

(3) 日本文明と西欧文明の基礎にある封建制度

○国総研

―― 今でも、もめごとがあるのは大体乾燥地帯ですね。一方、最初の文明が起こったのもその地域なんですよね。

○梅棹

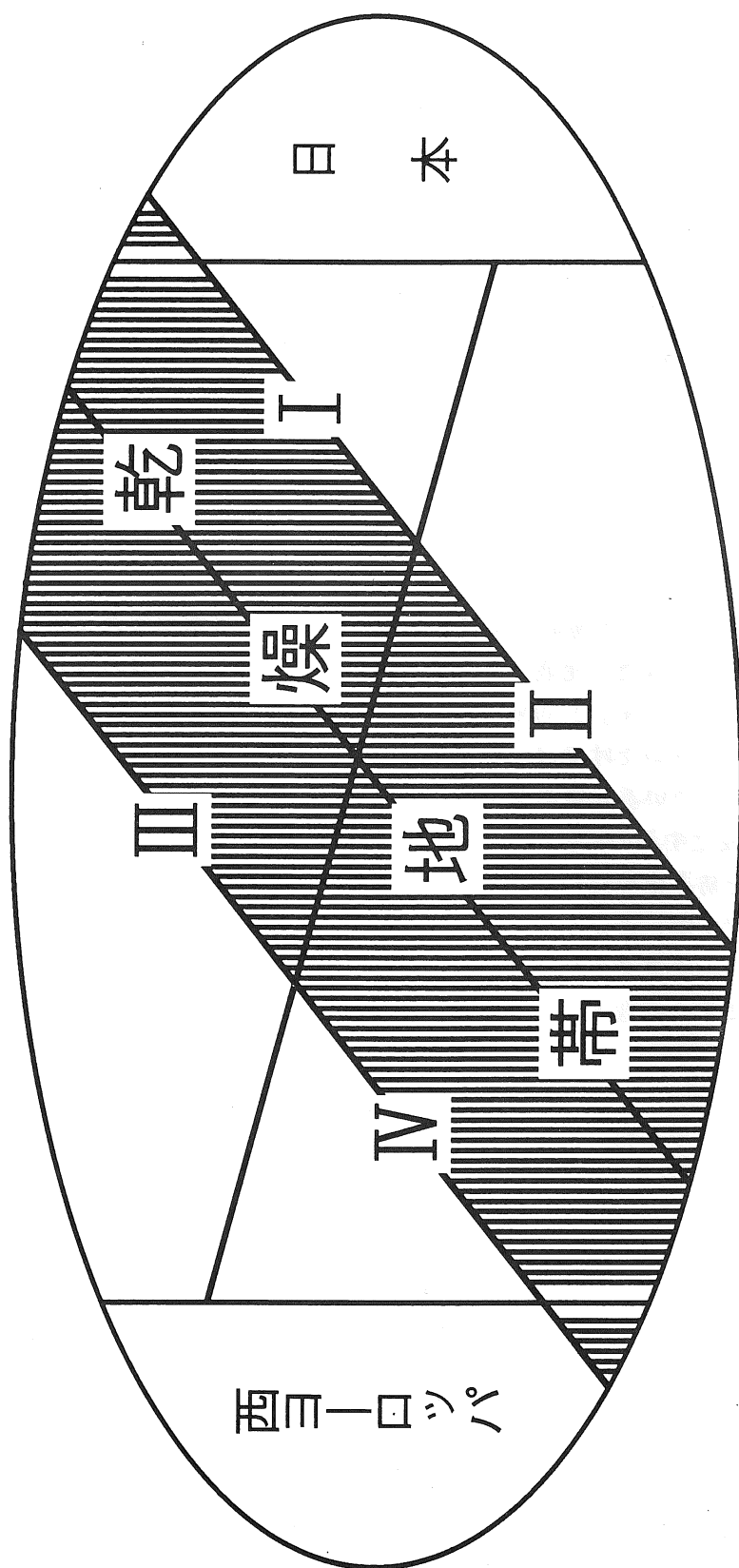
―― 乾燥地帯の中心が砂漠です。その外側はステップなんです。ステップからさらに外側は、森林ですが、そこは非常にやさやかな気候の土地で、農耕の適地になっています。そこは古代文明の発祥地なんです。ところが、少し文明ができて、国家ができて、社会が成立してくると、乾燥地帯の暴力がそれをつぶしにかかる。何遍でもやって来るんです。最近、問題になっているアフガニスタンですが、私はあそこに半年いたんです。あそこはやっぱり暴力の源泉の一つです。インドはあそこから出てくる暴力で何遍でもやられた。その点では、日本と西ヨーロッパは砂漠から遠く離れていて、恵まれた位置にあります。それで助かった。

○国総研

―― 確かに外敵があるかないかというのは大きいですね。

○梅棹

―― 大きいですよ。日本も西ヨーロッパも、最大の暴力を一番絶頂期において防ぐことができた。それによって、13 世紀に封建制の基礎ができたわけです。封建制ということは、要するに地方分権制ですからね。地方というものをいかに上手に育成するか、これが封建制の基本原理です。西ヨーロッパも日本も非常に上手に地方の力を育てた。



Iは中国世界、IIはインド世界、IIIはロシア世界、IVは地中海・イスラーム世界

図-2 ユーラシア大陸の模式図 (梅棹忠夫著『中央文庫 文明の生態史観 改版』中央公論新社, 1998年, p.202より)

2. 日本の文明の基礎は封建制にある

(1) 封建制の基礎は鎌倉幕府にはじまる

○国総研

―― 今ほどのお話で、遊牧民の侵略を防ぐことによって封建制の基礎ができた、封建制は地方分権制であり、日本文明と西ヨーロッパ文明の共通のものであると言われましたが、封建制と文明の関わりのところを、もう少しお話しいただけないでしょうか。

○梅棹

―― 日本という国は幸いなことに、一遍も外敵にやられたことがない。これで助かったんですな。根本的な変革、外力による変革を受けずに来た。私はオートジェニックという言葉を使っているんです。自成的です。アロジェニックというのは他成的。外から強い力が加わって、社会の根本が破壊されるというケースですね。日本と西ヨーロッパの場合は非常にうまくいった。オートジェニックの世界ですね。だから封建制ができたんだというふうに私は見ているんです。12世紀末から13世紀、あの時代が決定的なんですね。日本という、現代のわれわれの存在の一番ベースにあるのはそこですな。

○国総研

―― 12世紀ですか。

○梅棹

―― 12世紀末です。鎌倉幕府の成立が12世紀の末でしたね。13世紀に日本国家の骨格ができたわけですよ。同時に日本社会の骨格ができた。元寇、あれは天佑神助ですけど、元寇のさんたんたる被害を被らずにすんだ。文永、弘安の役です。2回来て、2回とも助かった。しかし、助かったのは天佑神助には違いないけれど、台風のせいだけではないですよ。あのときに鎌倉幕府による全国動員の体制がある。これはやっぱりものすごい。元軍の襲来を八幡浜でとにかく防ぎ止めた。

西ヨーロッパと日本の封建制が成立するのは、ほとんど同じ時代ですね。13世紀です。リーグニッツでドイツ騎士団がモンゴル軍を防ぎ止めたのも、元寇とほとんど同じ時代です。それも一遍モンゴル軍の方が勝って攻め込むわけですが、ところが、はっと気がついたら、モンゴル軍は東へ引き揚げていった。どうしてかと思ったら、オゴタイハーンが死んだという。それで引き揚げていった。こうしてヨーロッパは助かったわけです。元寇と同じですよ。日本がフビライハーンの時ですから、ちょっと後ですけどな。

○国総研

―― 騎士団がいたというのも同じですね。

○梅棹

―― 鎌倉武士団と同じですよ。ドイツ騎士団。すでに動員体制ができていた。

(2) ドイツ、フランスも封建社会にその基礎がある

○国総研

―― そのときのドイツも多国連合みたいな国家ですよな。

○梅棹

―― そうですね。ドイツはテリトリアルシュタート、領邦国家です。それは、幕藩体制と実によく似ています。ドイツには、幕府というものはないんですが、プロイセンが最大の軍事国家ですから、これが支配しているみたいなものですよ。ドイツは獅子とキツネとネズミの連合だといいますが、獅

子というのはプロイセンです。キツネというのはバイエルンで、中級。残りは小さい国がいっぱいある。日本の体制と同じだ。

○国総研

―― 鎌倉があつて。

○梅棹

―― 江戸政府もそう。幕府があつて、大名がいる 14、5 世紀からの国人層、田舎侍も各地にいる。それらがいろんな組み合わせで連合体を組んでいた。

私はヨーロッパの各地をたずねあるいたことがあるんですが、フランスあたりでも田舎へ行くと、田舎侍の城がたくさんあります。小さい城なんです。それは日本の国人層ですな。田舎侍です。それがいろいろな連合をしているわけです。連合というのは契約なんです。どちらかが主君になって、どちらかが家臣になってという形で、それが 14、5 世紀にだんだん固まってくるんですな。

（３）近代国家の始まりは織田信長

○国総研

―― 封建制を基礎として近代社会が成立する。近代社会というと明治維新、明治政府以降というイメージが強いのですが、近代社会は一体いつ頃から始まったとお考えでしょうか。

○梅棹

―― 日本社会というものは、普通に言われているよりはるかに先進的な社会です。近代社会ですね。近代契約社会に入った歴史が古いんですけど、それで相当年代を重ねてきておりますから、成熟社会ですね。本当にそうになってきた。私は日本の近代、モダンという時代は、16 世紀中頃からその段階に入ったと見ていますけど、一般には 19 世紀と思われているでしょう。とんでもない。ちょっと史実を綿密に調べたら、それは違うんです。私は象徴的な事例を捉えれば、織田信長から近代に入ったと見ています。どこでかという、比叡山焼き討ちからです。あれで宗教的権威から解放されたわけですね。近代的原理による社会づくりが始まった。だから、戦国というのはきわめて近代的な現象ですね。

○国総研

―― その時代から、流通だとか、民間の活動というのものすごく盛んだったようですね。江戸時代のトゥーンベリだとかケンペルだとかは、ヨーロッパから比べたら、ずっとたくさんの人が行き来しているとか、言っていますね。

○梅棹

―― トゥーンベリは、18 世紀の日本に来て交通状態を絶賛しているでしょう。道路の整備状況を絶賛にしている。やはり 17 世紀に日本に来たケンペル、ケンペルがわりに日本のことを書いていますけど、私はドイツの友人にいろいろ教えてもらって確信を強めたんですけども、ドイツ人があそこたくさん来ているんです。日本から中国へ行き、インドについて書いているんです。いっぱい書いているけれど、日本のことは一番簡単なんです。簡略なのです。そして、中国、インドのことを詳しくいろいろ書いているんですね。どうしてかという、友人のドイツ人は、あたりまえだと言っていました。その当時、ドイツから日本へ来た連中は、日本へ来て調べてみたら、ああ、これはドイツと同じやと。何も書くことないと。殿様がおって、侍がおって、町人のおって、坊主がおる。同じやないかと思ったのでしょうか。

―― （笑）。

それで、侍がみんな剣を持っている。同じや。ところが、中国へ行ったら全然違う。そういう構造になっておらんわけです。殿様はおらんし、侍はおらん。それで、これはどうなっているか、非常に興味を持って調べた。日本はドイツと全く同じやった。好奇心で来たような人はがっかりしたらしい。

私はヨーロッパの友人が何人もおりますけど、日本へ来た人に聞くと、今でもそうだと思います。これはヨーロッパと基本的に同質的な社会です。ヨーロッパ人の一般的な見方ですね。よく日本をわかった人はそういうふうに見ているんです。そこのところは、むしろ日本人の見方の方がおかしい。日本は後進社会みたいに見ていた。

○国総研

―― 日本はヨーロッパに比べて遅れているというのがキーワードになっていますからね。

○梅棹

―― 私も随分世界中をうろうろ歩きましたけど、全然事実誤認ですよ。ヨーロッパへ行っても、日本よりどこが進んでいるのや。何も進んでしません。同じことです。

（４）自己規制を通じて契約社会が成立していた

○梅棹

―― 日本は、江戸時代にまさに封建道徳がしっかり根づき、人間内部に改造が起こった。それによって、道徳と言うてしまえば身も蓋もないですけど、自己規制ができるようになった。

○国総研

―― そうすると、封建制というのは、ある意味で心の中での秩序みたいなものなのではないでしょうか。

○梅棹

―― そうです。精神の基本からの改造をやったということですね。それが社会というものの根本をつくっている。多少そうでない面もあるようですが。しかし、基本はそうでしょう。近代社会というものの一番基礎にある今の契約の問題、契約の問題というのは、契約を守るということですから、ある種の人間の誠実さということです。

○国総研

―― 確かに御恩奉公というのは、ある意味では社会福祉まで含まれた概念ですね。働けなくなっても、ちゃんと飯は食わせてあげるよ。今まで働いていればというような世界ですよ。

○梅棹

―― そう、そう。それをきちっと社会の慣習というか、基本的な約束事として、みんながそれを承知で守っているわけですよ。これが文明というものですわ。文明というのは、私の用語では、装置系と制度系、両方あるんだということです。装置系というのは、これはハードの世界です。制度系というのはソフトの世界です。それが今の内面規制の問題を含めて、人間精神の構造の問題です。それができているということです。それはやっぱり相当長い間、封建制というものを経験して、その中で練り鍛えられてきたものなんですね。一方的に上から押しつけられたものじゃないわけです。封建制というのは、一番基本的に相互契約の問題ですからね。契約、約束事を守るということですから。

（５）封建社会を経験しなかった国とその文明

○梅棹

―― 本当に、ドイツ、フランスの中世は日本とよう似てますね。社会情勢は同じです。ひどい点はどっちもひどい。18世紀初期のフランスなんてひどい状態です。社会状態は悪いですな。

○国総研

―― そのようですね。ジャン・バルジャンなんかを見ると、よくわかりますけど。

○梅棹

―― あれはそうですね。西ヨーロッパも日本も、18 世紀、19 世紀にそういう状態から脱出したんですね。ついにそういう状態から抜け出せなかったのが中国とロシアです。ロシアはひどいですよ。ソ連時代ですけどね、私は何遍も行っているんですけど、ちょっと地方へ行ったら、ひどいところだな。

○国総研

―― 例えばどういうことですか。

○梅棹

―― ものすごい貧乏ですよ。驚くべき貧乏。そして、人間の意識の解放ということは非常に遅れています。私の友人でロシア通のがおるんですけど、彼はロシアに長いこといまして、ロシア人についてこう言っています。なるほど封建制をくぐっていない人たちというのはこういうものだなと思ったそうです。自己規制というものが全然できておらん。自己規制のない人間というのはこういうものかなと、つくづくそう思うと言っていましたね。

西ヨーロッパは日本とよう似ています。私は諸外国を自分で歩きましたので、実感として本当にそう思ったですよ。逆に、これは違うなと思うのは、私は終戦の前後に、2 年間、中国で暮らしていたんですが、中国という国は日本と違います。こんな国はどうにもならんなあという実感で帰ってきました。

○国総研

―― 今はその中国が相当力を持ってきたというか、アメリカに留学生をたくさん出して、アメリカのノウハウをどんどん吸い込んで、中国国内で力を持ちつつあるという流れが出てきているみたいですね。

○梅棹

―― これは私はある意味で楽しみなんです。留学生が中国社会を変革する力になるのかどうか。なったら大したものですよ。おもしろいと思うんですね。全然あかんかもしれません。全部アメリカ人になってしまう可能性もありますからね。

しかし、彼らは本当に中国へ帰りますかね。留学生という点から言うたら、私が戦前に中国へいた頃からたくさん行っているんです。ヨーロッパにも。その連中がほとんど近代中国の建設に役に立っておりません。基本的な原理が、心の中の原理が違うものですから、結局、全部個人の私利私欲で動いておるんです。だから、国家を近代化する力に余り役に立っていない。それは今でも多分そうだと思います。

要するに、中国では封建制ができなかった。したがって、封建制の内面構造としての制約とか誠実さだとか、そういうものができなかった。個人の能力はものすごく高いです。しかし、それが社会的なものにはならない。一方、中国では、人倫関係は大変発達しています。人倫関係というのは、要するに基本的には血縁社会。血縁関係を超えるということは、今の中国でも多分至難の業だと私は思いますよ。血縁で動く社会ですから。

○国総研

―― 生まれたままが一番いいという人は、とても聞いてもらえない。生まれたままの子供が一番いいんだと、そういう人たちにとってはとても耐えられないものかもしれないですね。

○梅棹

―― しかし、そういう人たちは生まれたままの子供を見ておられるんですかな。自然児というものがあるのか。私は、アフリカで仕事をしていましたので、かなりそれに近い状態を見ているんです。自然児というのはどういうものか。それは驚くべきものですよ。それでも、どんな未開、野蛮な人たちでも、ちゃんと精神があるんです。お互いの契約というか、約束事の認知から始まるんです。私は恐らく世界で一番野蛮だと見られている連中の中にしばらくおりましたので、人間精神の崇高さみたいなものをよく知っているんです。偉いものですよ。そういう連中でも大したものですよ。あるところまではちゃんと守っているんです。

○国総研

―― 最近の若いお母さんが子殺ししたり、お父さんが殴り殺したりしてしまうというのは、そういうものから見たら、人間そのものの精神構造がどうなっているんだろうという感じがしますね。

○梅棹

―― そうですね。かなり病理的なものがあるんでしょうかね。ちょっとひどい現象が起こります。それはいつの時代にもあったんでしょうけど。暗いネガティブな面を見れば、いつの時代にもそれはあります。江戸時代でも随分ひどい話がありますから。

ここ国立民族学博物館には時々、各国から随分偉い学者が来るんですけど、私はつい議論を吹っ掛けるんですよ。そうすると、大抵、近代主義者ですから、意見の違う人が多いんですけどね。おもしろかったのは、キッシンジャーが議論しに来たときです。ニューヨークにいた日本の総領事がけしかけて、日本へ行っても、いつも政治家にばかり会ってるからだめなんだ、一遍、知識人に会ってこいと言って、私のところに来た。博物館を見に来たのと違う。私と議論しに来た。やっぱり文明論をやったんですが、私が、封建制こそが近代の母であると言うと、キッシンジャーはびっくりして、「私は封建制は悪いものだと思っていた。」と言うわけだ。「あれこそけしからんものだと思っていた。」そうやないですよ。考えてごらんください。日本はドイツと完全に同じです。封建制がしっかりしていた。だから近代化できたんだ。キッシンジャーはドイツ系ですから、そう言われたら納得するしかない。

○国総研

―― 向こうからのえらい力の強いものが来た。そこで、何か遅れているように感じる。アメリカが力づくでグローバルスタンダードと称して、アメリカ型の契約なり経済を持ってくる。日本にもっといいのがあったのに、グローバルと言いつつ、アメリカ型にシフトしている。ヨーロッパのかたと話していると、実はそんなに違っていなかった。今も昔と同じようなことを見ているような気がします。

○梅棹

―― アメリカは、先進文明国みたいな顔をして言うていますが、アメリカ流の流儀の問題にすぎないので、それは文化の問題です。文明ということについて言えば、どっこいどっこいであって、大して差はない。ただ、文化は違います。アメリカ流の文明論というのは、文化論です。好みの問題。趣味の問題みたいなもの。それは日本とアメリカでは違います。

3. 日本の封建制の理解の誤り

(1) 封建社会とは地方分権社会

○国総研

―― 先生は、地方分権と相互契約の観点で、封建制が、日本や西ヨーロッパの文明を作ったとおっしゃっていますが、今、感覚的に封建という言葉はものすごく悪いものだというイメージで捉えられますよね。これが新しい概念としての封建なんだと。先生のおっしゃるようなですね。先進社会としてつくり上げてきたのはこうなんだよと、何かそういう言葉はないんですか。

○梅棹

―― 部分的に代替する概念として言われているのは地方分権でしょうね。精神的なことはどうでしょうな。私は封建でいいと思って使っているんですけど。

―― (笑)。

○国総研

―― どうも私ども中央省庁にいるものだから、中央集権派じゃないかというので、新聞なんか、そういう論調で書くんですけども、私ども、建設省時代からそうなんですけれども、地方整備局、事務所がありまして、それぞれの地域づくりを手伝う機関があります。事務所は、大体昔の1つの藩と同じようなエリアを受け持っていて、地域の人達と一緒にいろいろなことをしています。

○梅棹

―― そうですね。各地方へ行くと、藩制時代の立派なものがたくさんあります。例えば、庄内の酒井家。酒井家は、非常にいい大名でして、よくやっていました。あの藩は封建制の中でも上等な藩です。今でも酒井家はえらいことをやっていますよ。致道博物館というおもしろい博物館をつくっている。たいへん立派なものです。

○国総研

―― 以前、ある方がちゃんと分析されて、建設省は、それぞれの地域づくりの中から上がってきたものを政策にしていると、評価してくださっている方もいらっしゃるんですけども。

○梅棹

―― 今でも私は、地方分権というか、地方の力を大事にした方がいいと思っているんですね。

○国総研

―― 封建制により、人間、社会の自己規制がなされるようになり、契約社会が成立し、日本と西ヨーロッパにおける近代文明を築いた。なるほど、先生のお話を伺うと納得できるのですが、封建制というと何かものすごく悪いことのようなイメージがある。これは、私どもに限らず、日本国民の多くが、そういう悪いイメージを持っていると思うのですが、これにも何か理由があるのでしょうか。

○梅棹

―― 多分、特に封建制というのは家庭問題と結び付けて解釈されて、これが非常に悪いイメージをつくり上げてしまった。実は柳田国男先生以来の日本民俗学の伝統で言うと、あれは全くの誤解なんです。江戸時代までの日本は家族主義と違った。日本には家族主義はなかったんです。それを宣伝して封建的家族制度を確立したのは明治政府だった。明治民法というのがそれです。それまでは、日本の家族制度ではそういうものはないんですよ。もっと言えば封建的上下関係、そういうものもなかった。むしろ契約社会的だった。明治になってから民法をつくるときに、有名な民法論争というのがあって、「民法入れて忠孝減ぶ」ということが行われた。明治民法は初め、明治時代のお雇い外国人

としてフランス人の法学者でボアソナードというのを雇ってくるんです。ボアソナードが入れたのは、完全な今の近代的民主主義民法です。それに対して猛烈な反対が起こった。反対はどういうことかという、「民法入れて忠孝滅ぶ」。伝統的忠孝を滅ぼすものだというので排斥した。それによって封建的民法が明治になって成立する。

実際は、明治民法のモデルになったのは何かというと、武家法だったんです。武家のまさに封建法です。封建家族法にのっとって、庶民まで全部その法律で民法をつくった。今でも行われているのはこのパターンなんです。だから、戦後のいわゆる民主主義改革によって明治以前の民法に戻った点が大分あります。例えば、もともと日本は基本的に均分相続制ですよ。それを長子相続制にしたのが明治民法です。

江戸期では、家は長子が相続する。長子に相続させて、田畑を譲って、親は次男以下を連れて外へ出る。そこを隠居と言ったんです。私の子供時代、農村へ行くと隠居という家があっちこちにありました。それで、さらに次男が成長するでしょう。隠居を次男に継がせるんです。そして、三男以下を連れて、親は外へ出るんです。その制度は今でも多分あると思います。今でも隠居というのは、昔の次男坊の家の系統だということなんです。そして、次々に均分相続制で、均分とはいかないまでも、次々に田を分けていったんです。

それを全面的に否定して、長子相続制にしたのが明治民法です。それまでは、日本はそういうふうになっていなかったはずなんです。明治体制による逆戻り現象があります。明治政府が封建制をつくり出した。封建的な悪習を明治政府が随分引き継いだ点があるんです。特にそれは家族法ですね。家族制度、これはちょっと証明が難しいんですけども、江戸時代には、嫁姑のトラブルというのはほとんどなかったんじゃないですか。あれはどうも近代、私は近代遺制と言うんですが、あるいは明治遺制、明治につくり出された遺制、残された制度ですな。そういう点が日本には大分あります。明治政府というのは、そういう意味では非常に反動政府だった。日本社会の持っている二面性なんでしょうね。

日本封建制というのがいかに立派であったかということです。私は封建制こそが近代を生んだんだ、近代の母は封建制だという考えです。封建制をしっかりとつくった国は近代国家になった。西ヨーロッパと日本だけで封建制が成立して、近代国家になった。封建制がなかったらこうはならなかった。

（２）女性の進出は遅かった

○梅棹

ー ただ、日本とヨーロッパは、細かい点、社会システムという点から言うても、大分違う点がありますね。戦後、日本がヨーロッパと比べて一番遅れをとったのは、女性の問題ということがはっきりしてきた。女性の力をどこまで開発したかという点では、やっぱり遅れていますね。しかし、これは最近、ものすごい勢いで改善してきている。しかし、イギリスやフランスでもそうなんです。一番最初、例えば女性の参政権を確立したのはニュージーランドでしょう。私はニュージーランドに行って、そういう点でおもしろいと思ったんですがね。全体的に見れば、決して先進国じゃないですよ。ニュージーランドやオーストラリアは、労働立法とか、女性参政権とか、そういうものはみんな先進的なんです。どういうわけか、おもしろいですね。一番遅れたところ、辺境でそれが始まっている。

人が足りない。そこから始まって、それがイギリスへ飛び移る、イギリスがそうなる、それがアメリカへ飛び移る、ヨーロッパへ広がるという順番であって、いつでも先進的な立法は大抵ニュージーランドです。おもしろいことになっている。それが回り回って日本まできたわけですよ。これは認め

ざるを得ない。

4. 明治を近代の始まりとするのは間違っている

(1) 明治政府の失政

○国総研

―― 確かに江戸時代というのは、幕藩制で藩がそれぞれの経営をして、それなりにうまく動いていたんですよね。明治政府になって無理して中央集権にしようとして相当の歪みが起こったというのはあるみたいな気がしますね。

○梅棹

―― だから、現代における歪みのかなりの部分は、明治政府によってつくり出された歪みです。明治政府が封建制を否定したときに、封建制が持っている非常にいい点まで皆否定してしまったんです。

○国総研

―― どうして、日本がヨーロッパから見て遅れているという考えが定着してしまったのでしょうか。

○梅棹

―― 江戸期後半に、日本後進説が出てきた。どこからああいう考えが出てきたのかようわかりませんが、いろいろ誤解があるんですね。例えばペリーの黒船がやって来た。日本中が大動揺を来すわけですね。あのとき、みんなあれは鋼鉄船やと思ったわけでしょう。しかし、全部木造船です。鋼鉄船というのは誤解やった。何でそういう間違いが起こったかというと、あれはフナムシがつきますからコールタールを塗っておっただけのことであって、全部木造で、外輪、ガラガラというのがついていたんですね。あんな船でまともに太平洋を渡れなかったでしょう。19世紀後半において、造船技術から言っても大した差がないんですな。

○国総研

―― 多分、決定的に違ったのは蒸気機関かなという気がしますけれども。

○梅棹

―― そうです。それが近代産業革命のはじまりということになるんでしょうけどね。

○国総研

―― そこが現代も明治で大きく変わったんだと。ヨーロッパの文明を文明開化で入れたんだという象徴がそれになっていますね。

○梅棹

―― 私はこう見ているんですよ。実はほとんど差がなかったにもかかわらず、非常に差があるように拡大して宣伝したのは明治政府だった。日本後進国説を大幅に進めたのは明治政府だろう。というのは、明治政府は江戸政府を全否定した上に立っている革命政府ですから、江戸政府というものがいかにひどいものであるかという宣伝を一生懸命やった。それに対して、明治政府が非常に正しいんだ、いいんだ、新しく未来があるというふうに演出をしたのではないかと思うんですよ。できるだけ江戸期にまであったものを否定して見せた。実際はそんなに変わりません。

もちろん、蒸気機関車も普及から考えて、各国とも、むらがありますね。もし日本がヨーロッパに

あっても、そのむらはあったと思います。ヨーロッパの各国においても、鉄道の導入時期にはむらがありますから。

○国総研

―― 多分その中で一番遅いだけであって、決定的に遅れているわけではない。せいぜい 50 年かそこらの差ですね。

○梅棹

―― そんなものです。私は大体 50 年だと思います。すぐ追いつけるようなものです。それ以後のもそうです。江戸期のいろんな細かいものを一つ一つ見ていきますと、何にも遅れてはいませんな。紡績なんていうものは完全にそうですよ。紡績は、ヨーロッパのをそのまま入れてみてだめだったという例はたくさんありますからね。

○国総研

―― 先生が書かれていた中で、明治時代に入ってヨーロッパの技術者を連れてきてやったけど失敗したというお話が出ていて、仙台の野蒜築港というのが、その例としてあげられています。そもそも江戸の技術を使っていたら、あんな台風で壊れるような築港をしていないんですよ。それを粗朶沈床でやっているから、結局は砂上の楼閣をつくっているようなものだったんですね。あそこにとってみれば。

○梅棹

―― そうでしょうね。あれはほんまにひどい話、大失敗です。北海道開拓もそうなんです。全然スカタンやった。外国人を連れてきて、随分大規模な開発をしましたが、全然だめでした。あれは酪農が理想やったわけですが、実際に成立したのは水田耕作なんです。北海道で水田耕作なんて、一見無茶なんですけど、完全に成功した。

（２）西ヨーロッパより進んでいた江戸時代の衛生環境

○国総研

―― 例えば衛生の問題なんかをとらえても、パリと比べて、そういうものに対するセンシティブなものを日本の方が持っていたわけですね。

○梅棹

―― ありましたね。江戸には上水道が早くからありますからね。パリとロンドンの衛生状態はひどいものですよ。ペストが大流行をしていますしね。日本ではペストの病原菌がなかったのかどうか知りませんが、あんなひどいことになっていない。

○国総研

―― そのわりに、ケンペルは臭いのことを言っていますね。汚穢船があつて臭いとか。ヨーロッパは臭くなかったのでしょうか。

○梅棹

―― ヨーロッパの人は香水で消しておるわけです。香水が非常に発達している。日本は香水がなかったんです。

○国総研

―― 同じことをするための同じ機能を生かすためのシステムとしては、決して遅れていなくて、ちゃんとあった。たまたま流儀が違っていたということでしょうか。

○梅棹

―― 流儀は違います。

5. 総合技術者

(1) 土木建築家集団 石工集団

○国総研

―― 封建制度を基礎とした近代社会、契約社会。組織として非常に成熟していた社会。装置群、社会資本の整備においては、先生の本の中で「総合技術者」という話が出てきますが、先生が言われている総合技術者像というのでしょうか、イメージといいますか、もう少し具体的に教えていただければありがたいと思います。

○梅棹

―― 私は歴史家ではありませんので、具体的なものをつかんでおるわけではないんですけどね。歴史家がお書きになったものを見ると、そういう話が、ぼろぼろと出てきます。あれは、中井組といいましたか、江戸の将軍直轄の土木建築家集団。石工の方は甲州から出てくるんです。江戸時代には、そういう集団的な建設技術者がいたんです。その起源はもっと古いところにあると思うんですね。具体的に私はどれがどうだということはようわかりません。

○国総研

―― 先生の本の中で、今までの技術論では、できた物とそれを使う人々との関連づけが忘れられているというふうに書かれていましたが、先生のイメージされている「総合技術者」というのは、物をつくるだけではなくて、人がどうやって使っていくかを含めて考える技術者集団、そういうような感じでございますか。

○梅棹

―― 組織の中の話ですね。組織のことを考えなければいかんということです。

(2) 技術者軍団があったということが違う

○国総研

―― 一人一人が石工として技術があるとか、あるいは大工として技術があるだとか、それだけではなくて、日本では、それを組み合わせて組織的に何かをつくって、さらに、それがどうやって使われていくかということまで考えた。

○梅棹

―― 日本の技術というのは、だからよくできているんじゃないですか。個々の手の技能ということじゃなくて、総合的な組織ができているということ、これは大したことすな。その点で私は、ドイツなんかはどうなっているのかよう知りませんが、日本のはマイスター制度とは違うと思っているんです。マイスター制度は個々の人間の手の問題で、技能ですね。日本の場合は、そうじゃなくて組織です。まさに軍団ですわな。技術者の軍団みたいなものです。これが非常によくできている。それは、個々の手の技という意味の技術だけではありません。実は、私は京都の西陣の出身なんです。西陣というのは、すごいものですよ。大軍団です。たいへんな組織です。日本はどうしてああいうものが発達したのかようわかりませんが、各種にそういう非常によくできた軍団というか、組織があります。例えば日本の出版業というのは、どうして今、こんなに多くの会社がりっぱに成り立つ

ているのか、あれもやっぱり組織ですな。非常に組織がよくできている。今、関西で技術研究会というのをやっているんです。そこで、そういう技術者組織の掘り起こしを数年前からやっているようです。いろいろながありますよね。政府の仕組みと違うんです。民間の組織としてできている。

○国総研

―― それは単にいろんな職種が集まっているというだけではなくて、それを高める何かがある・・・・。

○梅棹

―― あるんですね。非常に有機的に結び付けられている部分がね。だから組織になるわけですよ。決して上からの圧力でそういうのができているのとは違う。

○国総研

―― 例えば先ほどおっしゃった西陣の場合であれば、一つ西陣織をつくるにしても、デザインする人から、染める人から、織る人から、あるいは販売してマーケティングをする人から、それが1つの軍団を成していると、そういうようなことですか。

○梅棹

―― そうです。組織者が、いわゆる織元というのがあるんですね。これが企画者であると同時に、販売までやっております。それが全体を締めくくっているわけです。その部分的な請負で仕事をする人たちがいるんです。本当にいろんな職人がいます。私は子供のときから見ていますが、職人がおって、それが全部織元の指揮命令というのと違うんですけど、みんな発注と受注で動いています。それがしかし、全体として見事に組織されているのです。

（３）ヨーロッパと違い信頼に基づいた契約書のない契約社会

○国総研

―― それは指揮命令ではないけど、何かあうんの呼吸みたいなことで結ばれていると考えれば良いのですか。

○梅棹

―― それよりもっと経済的なもので、きちっとルールができている。指揮命令じゃないですけど、要するに発注、受注です。契約ですわ。日本社会は一般に言われているよりはるかに契約社会です。

○国総研

―― 神との契約ではない契約ですね。

○梅棹

―― 人間と人間との契約です。これが本当に細かいところまできちっとできています。

○国総研

―― 確かに戦後これだけ経済が繁栄したのも、地方では中心となる工場と地域のつながりがうまくいって、それでうまくやってきたというところがありますよね。それが最近、どちらかというとグローバリゼーションの中で、外国のやり方というものもどんどんはいつてきて、そういう結びつきじゃなくて、打算の部分での結びつきというか契約というか、とにかく一番安いものが一番いいものだというような型になってきていますよね。

○梅棹

―― なっている。日本の社会については、明治以来、非常に大きな誤解が国民の間にある。例えば日本のしきたりは、「封建制」という馬鹿げた言葉で片づけている。とてもそういうものと違いま

す。日本の社会というのは、恐ろしく近代的な契約社会です。

○国総研

―― 契約書が要らないというのは、むしろ進んだ仕組みである・・・。

○梅棹

―― もちろんそうでしょう。契約書は要らない。要らないけど、全部ちゃんと何々という契約を認めているわけですね。

○国総研

―― 言葉より信頼で結びついた契約社会なんですね。

○梅棹

―― そう、そう。非常に進んだ契約社会です。私は京都の出身ですけど、京都の社会が実は一番進んでいるんです。今ずっと大阪にいますけど、大阪よりも京都の方がずっとそういう契約社会がきっちりできています。大阪の方がまだ素人くさい契約社会です。

○国総研

―― そうすると、東京なんかになると、とんでもないという話ですか。

○梅棹

―― 東京は田舎ですから。

―― （笑）。

東京は、はるかに遅れた社会だと思います。私が見てきた範囲では、京都は非常に先進的だ。あれは本当の都市です。今の契約によるシステム化という点で、行政がそうだったんです。私が聞いている範囲、私が子供のときは、まだ町内会の組織が非常にしっかりしていました。町内会と言わないで、公同組合という名前でしたけどね。「お町内」と言っておりましたね。保守連合です。保守の相互契約で町会を運営している。それは、上からの行政とは別ものです。市民連合です。

ただし、限定がありまして、その点がちょっと近代的でないんですけど、ブルジョア連合です。だから、いわゆる無産者、プロレタリアはそこへ入れない。それはずっとそうでした。町政の隅々までそうです。それから、市民の連合体としてのお宮さんの問題があります。お宮さんをどう支えていくか、そういう市民連合もあります。これも氏子という点では全部一緒のはずなんですけど、実際はブルジョアの連合体です。

それから、ご承知の祇園祭りがそうです。あれは、鉾が巡行するでしょう。あの鉾を維持しているのはブルジョア。上でコンコンチキチンやっているのは旦那衆です。お互いに町内で費用を出し合って、公同組合という組織を運営しているんですね。前で引っ張っている人がプロレタリアです。それは町内会に入れない。町内市民としての権利がないんです。恐らく 15 世紀ぐらいからそれでやっているんじゃないかな。

○国総研

―― 最近「中心市街地の空洞化」という言葉を使いますが、地方都市の場合、昔は町内会がしっかりしていて、それぞれの町の祭りもあってというようところが、町の中心から人がぼろぼろぼろぼろ抜けていってしまう。高齢化して、そこに後継者がいなくなってしまう。そういうコミュニティみたいなものが崩れてきているところがたくさんあるんですけど、京都の場合は・・・。

○梅棹

―― 大分抜けてます。歯抜けになっています。もう手が足らんようになってきた。組織は今でもちゃんとありますけどね。昔よりはやりにくくなっているようです。しかし、基本的な精神はずっと

流れておりますからね、意外にちゃんとしております。

6. 京都は観光地ではない

○国総研

―― 別な話になりますが、明治時代に京都に琵琶湖疏水というのが舟運の目的などを入れてつくられたわけですが、今は舟運を目的としては使われていなくて、大きな堀みたいなのが平安神宮の前を流れています。このような大規模な水路を造ったのは無駄な投資であったと批判される方もおられますが、それが今では京都の景観を形づくっているし、観光にも役立っているのではないかなという気がします。そのほかに哲学の道とか、南禅寺の水路橋などもあると思うんですけども、そういう観光を成り立たせるためには、神社仏閣も含めて、一部の人が無駄だと批判するような壮大な空間が必要なような感じがするんですけども、その辺について何かコメントはありますでしょうか。

○梅棹

―― 無駄というより、それは非常に重要なものだと思います。疏水によって、京都の動力が賄われるようになり、京都の近代化が進み、一遍に京都は変わりました。いまだに蹴上のところに発電所がありますな。あれができたために、京都の電化ができて、京都に市電が走りだす。余談ですが、私は疏水のトンネルを舟で通ったことがあるんです。琵琶湖から舟に乗って、ずっと長いトンネルの中を通って、蹴上まで来るんです。蹴上のインクラインというのがあって、坂道を舟がレールに乗ってくだる。あれは人間は乗れないんです。人間はあの坂道の上で下りるんです。また、あそこから水をドーと落として発電をやっている。その電力が京都の近代工業化を成立させた。今おっしゃったようなインクラインとか水道橋とか、いろんなもの、それはそのときにできた工業化のための装置系がそっくり後に観光に利用された。観光のためにつくったのとは違います。

ついでに、申し上げておきますが、今「哲学の道」ということをおっしゃいました。私は北白川に今でも家を持っているんですけど、あの「哲学の道」というのは京都人の発想とは全然違います。なんといやらしい言葉をつくるんだといって非難した人がいましたけど、京都人がそんなことを言いますかいな。あれは、よそから来た人が発明した言葉ですわ。京都には確かに他国から来た先生方がたくさんおりまして、哲学者たちが散歩していたことは事実ですけど、あの言葉は京都人の発想と違いますなあ。

○国総研

―― 京都の人は、その言葉をいやだとは言わなかったんですね。

○梅棹

―― いやだとは言わなかったかもしれませんが。あの辺一体は半植民地みたいなところで、北白川というところがそうです。新開地なんです。北白川は、もともとは北白川村ですから、昔の北白川宮の領地なんです。本当にお百姓の土地だった。私の家なんかもそうでした。だから、農地の中に建っているんですよ。今はほとんど宅地になっていますけども。もともとあそこは近郊農村なんです。

○国総研

―― 観光は、外の人が、ここはいい、観光地だということと、地元の方が、いや、そうじゃなくて、ここがいいということと、大分食い違っているのかと思いますが。

○梅棹

―― 随分食い違いがありますね。私はもともと京都人ですから、その矛盾はほんまにひしひしと感じますよ。京都はこの一世紀間に随分変わりましたからね。その間にそういうあつれき、摩擦があったように思います。よその人が見る京都とかなり違うんです。例えば一番根本的に違うのは、私のような京都人から言うたら、京都が観光都市だなんてとんでもない。こんな迷惑なことはない。観光はやめてください。入ってきてもらわなくてもよいということです。観光客お断りというのは、京都人の本音でしょうね。京都は文化のまちであって、文化と観光は正反対なのだという考えです。

○国総研

―― 「一見のお客さんお断り」。

○梅棹

―― そう、そう。極端に言うたら京都は非常に都市性というのを重んじる場所ですから、よそから来た人は全部お上りさんなんです。観光地はお上りさんの骨頂やと。お上りさん用に、京都には確かに見せ場が幾つかあります。そこだけ見てください。京都市民の中に入ってくることはお断りというのが京都人の考えです。けれども、今日のような状況になったら、そんなことも言っておられんというところでしょう。

○国総研

―― 国際的な観光地として売り出さないと、なかなかお金が入ってこないですね。

○梅棹

―― そうです。しかし、今から 50 年ほど前になりますか、京都は国際文化観光都市宣言をやりました。そのためにどういうことになったか。京都市民はみんなそっぽを向いたんです。観光で京都市民の収入を一体どれくらい賄えるのか。ちょっと私は調べてみました。今でも多分変わらんと思いますが、何もかも入れて 5 %です。

○国総研

―― そんなものですか。

○梅棹

―― そんなものです。つまり京都は観光都市と違うんです。ただし、よその人が滞留するという点まで観光に入れたら、状況は異なります。例えば、おびたしい大学生が随分京都に流れ込んでいます。これは観光とちょっと意味が違う。これは確かに京都市民を構成する非常に大きな要素です。京都は学都です。しかし、京都の人はいわゆる観光地へほとんど行きませんからね。

大学はたくさんあります。短大まで入れたら随分な数あるんです。それも、ほとんどが地方の学生。地方から子供を集めてくるんですね。そのために、京都の大学では、何々大学の上に京都と付けているのが多いんです。京都何々大学。そうでないと、地方の子供たちが来ないです。親が離さない。「京都」と付いているから安心して子供を出すそうです。

7. 日本では灌漑を行い新田を開発する流れの中で低平地の利用が始まった

(1) イタリアでも低平地を利用しているが台地の上に住んでいる

○国総研

―― 日本は戦国時代末期から大河川流域の開発が進みましたが、そのときの手段として堤防を中心にして、治水事業を行い、川の氾濫域を生産性のある土地に変えてきたわけですが、諸外国と比べ

て、少し状況が異なるように思います。このへんについてのコメントはありますでしょうか。

○梅棹

―― どうでしょう。ヨーロッパも同じじゃないですか。ヨーロッパにも、堤防はありますよ。きちっと河川の管理ができていますよ。ドナウとかラインとか、きっちり固めています。洪水が起これるように、非常に気をつけている。そのようなことがあまりないのがインドと中国です。これらの国はめっちゃくちゃです。中国にも堤防はあります。例えば、長江の中下流域に壮大な堤防がありますけど、しばしば破れてひどいことになるわけです。特に中流がひどいですね。大体そもそも湖南省は昔から大氾濫地域で、洞庭湖というのはダムです。その洞庭湖に一応水を逃がすようになっているんですが、それが外へ出て、何遍でも大被害を被っている。南京から下流へ行くと、非常に立派な堤防があります。黄河もそうです。黄河も、今は、一応堤防はあります。この頃は黄河は逆に水がなくなってしまっている。

○国総研

―― ロンドンでは、その中心街は高台にありますが、東京や大阪は、河川の氾濫域、つまり沖積平野に都市が発達しているというのを比較して、だから日本では治水が必要なんだと国土交通省は主張しているわけなんですけど。

○梅棹

―― そういうことは多少あります。例えば、イタリアでは、集中居住地域をチッタといっていますが、それはみんな尾根筋にあります。尾根筋に町が並んでいる。私はしばらくイタリアの中部山岳地帯にいたことがあるんですけども、そこもそうでした。山の上に並んでいる。だから、水田はできないです。黄河の下流域なんか、大水田地帯です。あれは氾濫する。中部イタリアは米ができない。大体麦です。作物の制限がありますけど、おっしゃるとおり、南ヨーロッパにはそういう傾向がかなり顕著にあります。それから南アメリカがそうですね。例えば私の記憶では、リオデジャネイロでは山の手と下町に分かれています。山の手は全部高級住宅地です。下の方は下層民の貧民窟です。下の平地の方は、電気、ガスなどのライフラインがほとんどできていない。上の方は、みんなできている。山手の相当傾斜のきついところに白人が住んでいるからです。

（２）関東の低平地利用は17世紀以降

○国総研

―― 日本も基本的には、古くはそうだったわけですね。

○梅棹

―― 日本も、奈良時代はその傾向があります。しかし、江戸時代には、もう氾濫域に住んでいました。

○国総研

―― 昔は、大体丘陵地の縁辺部に住んでいたという形ですね。

○梅棹

―― だんだん干拓が進んで、下へ下りてきたんですな。それまでは、西日本で奈良盆地でもそうですが、丘の方に住んでいましたね。水田が大開発、特に西と東とで随分違いますけれど、関東で大開発が進むのは、17世紀以後ですね。新田開発が大規模に行われる。そこで下へ下りてきた。

○国総研

―― 水田の開発とともに人の住むところも低地域に移ったんでしょうか。

○梅棹

―― そうだと思います。上手に干拓をして、水田をつくる技術がないときは、住めないですね。それができた。その技術をもって関東地方の開発が進むわけです。

○国総研

―― そうすると、土地の所有制度だとか藩の間の競争とかということではなくて、やはり米作と一緒に下りてきたという理解でいいですか。

○梅棹

―― 基本的にそうだと思います。それで関東地方の開発がかなり遅れるんですよ。関東において、関八州一円の本格的開発というのは、17 世紀でしょう。

○国総研

―― 利根川の東遷などに合わせてですね。

○梅棹

―― そうです。だから、それで開発が進んで、関西地方から随分人が流入してくるわけですね。今でもその傾向があるようです。地方の資本家というのは、大体関西から来た醸造業者。それがその土地の金貸しにもなる。醸造業と同時に金貸しで、金を農民に貸して、それで土地を取り上げる。だから、大地主制が出てきた。関東では、親分子分制があるんです。私の親しい友人ですけど、中根千枝という東大名誉教授がおるでしょう。彼女は『タテ社会の人間関係』ということを書いている。日本の社会は、親分子分、つまりタテになっていると主張した。彼女は関西のことを全然知らんから、そう思った。関東だけ見ていた。関西はタテ社会と違います。完全なヨコ社会です。タテ社会というのは、親分子分制という関東を研究した結果です。

農村はヨコ社会です。講組（こうぐみ）社会です。親分子分と違うんです。既に 1930 年代ぐらいから、社会学者の間で親分子分社会と講組社会というのを東西で対比した類型化が言われていますが、彼女はそれを知らなかったのかな。タテ社会は関東の開拓地の類型なんです。それは確かに関東から東北にかけては、かなりそういう傾向があります。だけど、西日本は全然違います。全部ヨコ社会です。

（３）自然条件と文明

○国総研

―― 日本は、火山もありますし、台風もしょっちゅうくるし、地震も起きます。地形も険しくて、社会資本を整備するという仕事をやっていると、物一つつくるのでも非常に大変なんですけれども、自然条件が文明に反映されておったり、ほかと比較したときに何か特色として出てきているとか、そういうことはございませんか。

○梅棹

―― もちろん自然条件は非常に大きな基礎条件ですね。確かにヨーロッパは地震があまりない。火山もイタリアだけです。その点では、ヨーロッパは非常に恵まれている。自然条件に恵まれているという点から言えば、モスクワというのは、大磐石の上に乗っているわけです。モスクワは町ができてから一遍も地震がない。驚くべき都市です。もちろん火山もない。しかし、余り文明が発達しなかった。

気候類型から言うと、日本とそっくりではないけど、基本的に同じなのは、ドイツ、フランス、スペイン、イギリスです。日本は長江下流域と大体同じ気候圏です。朝鮮半島の一番南の端、これが大

体同じ。しかし、そのほかのアジアとはえらい違うんです。西ヨーロッパの大部分は、ちょっと類型は違うんですけど、日本と同じなんです。この条件によってその後の歴史が同じように進行した。ただ、西ヨーロッパは大西洋を向いているので、雨の降り方が違ってきます。冬が雨の多い季節なんです。日本は夏に雨が降る。しかし、どちらも雨期には洪水が起こります。

○国総研

―― 四季がはっきりしている。

○梅棹

―― 四季が非常にはっきりしている。

○国総研

―― そうですね。四季のうつろいに対して日本人は敏感ですけども。

○梅棹

―― やっぱり相当敏感です。ちょっと日本より季節的にずれがあります。日本の夏は相当暑いですな。

○国総研

―― 大体似たようなものなのでしょうか。

○梅棹

―― 私の経験から言うと、北イタリアの農村の景色を見ていると、日本と同じやなと思います。ポー川流域のミラノあたりも感じがよう似てますな。

○国総研

―― ポー川の流域というのは、水田地帯ではあるけれども、あまり人口が増えなかったということなんですか。

○梅棹

―― いや、いや、ミラノは大きいですよ。ミラノはポー川の上流です。下へ行くと、かなり洪水があるでしょう。

○国総研

―― ミラノはどっちかというと工業都市ですよ。

○梅棹

―― ミラノは大工業都市で、新しい製品が次々出て、おもしろいところです。日本とちょっと違うのは、ミラノはすぐ北がアルプスなんです。北をみると白雪を抱いた山の嶺々が並んでいます。私は、ミラノ近傍には住んだことはないんです。私がいたのは、イタリアのもうちょっと南。アペニンの中部山岳地帯でした。これは先に出てきたチッタが山の上に並んでおって、斜面で麦作をやっているんです。それから、上の方ではヒツジを飼っている。あれは日本にはないですね。

○国総研

―― 尾根にチッタがあって、斜面で麦作をやって、河川の氾濫はほったらかしというイメージですか。

○梅棹

―― そうですね。中部イタリアあたりはそうなってます。北イタリアは氾濫原ですね。多分、アルプスの北側へ来ると、これも大氾濫原がいっぱいありますな。

○国総研

―― オランダは。

○梅棹

―― オランダは水浸し。

―― (笑)。

だからスケートが強い。

○国総研

―― リンクがあっちこっちにあるんですね。

○梅棹

―― そうです。小さい子供からスケートで、どこへ行くのでも水路で行くわけです。あの地域は、ライン川の下流域にあって、低湿地です。今はきっちり治水が行われて安全ですけど、アーヘンから北の方はベチョベチョの低湿地でしょう。ベルギーはそうでもないです。ベルギーはああいう巨大河川がありませんからね。

8. 地方の力を大事にした方がよい

○国総研

―― 明治政府で封建制を否定して中央集権となったということですが、調べてみると江戸時代に五街道とかができていて、流通のすごいシステムが、明治以降よりも勝るとも劣らないくらいうまく機能していた。本当にすごいというふうに、思うのですが如何でしょうか。

○梅棹

―― 五街道が整備された江戸時代は、そういう点で国土計画が非常に上手にできた時代じゃないですか。よくやっています。ただ、実際の資本とか労力は各地方に押しつけているわけです。幕府は、うまくやっていた。

○国総研

―― 幕府は、金も出していないですね。

○梅棹

―― 金は、出しておらん。みんな、地方にやれと言うわけ。うまいことやったもんです。

○国総研

―― それがそれぞれの地方、藩のためにも役立つものをつくっていたわけですね。

○梅棹

―― そうです。それによって藩は非常に刺激を受けて、人材育成でも盛んにやるわけです。藩が人材を持たなかったら、これはひどいことになる。各藩が藩校という藩立大学をつくります。あれで人材養成をやった。藩校はもともとは武家の学校ですけど、江戸時代後期には士庶共学になっています。農民、上層の町人がたくさん入っている。藩内の人材の教育をやっている。それで、たくさんの人材が出てくる。これが明治政府をつくるわけです。地方のどこからでも人物が出てる。そういうことは、先に述べたロシアなどではなかった。地方から人材が出ていない。

○国総研

―― 識字率が非常に低いんですね。

○梅棹

―― 識字率はものすごく違いますよ。18 世紀末で日本が多分世界で一番識字率が高い。女性は

低いですけど、男性は半数が字を読めた。

9. 日本は儒教社会ではない

○国総研

―― 華僑なんかは血縁で動く社会ですよ。

○梅棹

―― 血縁の情報網で全部やっておるわけです。株式会社ができない。日本でなぜ株式会社が発達したかというのはそのことなんです。要するに日本は血縁社会ではなかった。契約社会だった。日本は一時、血縁社会みたいなことをみんな言いましたけど、うそです。日本は決して血縁社会ではない。日本の社会は、例えてみたら、砂粒を掌ですくい上げるようなものですよ。間からみんなこぼれていく。というのは、砂粒と砂粒の間の粘着力が非常に弱く、サラサラッとしているから。中国は違うんです。粒と粒とがきちっとくっついていきますからこぼれない。そういう違いがあります。

中国も韓国も儒教社会です。儒教社会ということは、要するに、血縁社会です。

ところが、日本人の自己誤解の一つですけれども、日本を儒教社会だと思っている人がたくさんいるんです。とんでもない。どこかに儒教のお宮さんがありますか。一つもないでしょう。儒教の神を拝んだことは一遍もない。ところが、韓国は徹底的に儒教社会ですね。日本は儒教社会ではありません。教養として儒教の思想は入った。しかし、儒教という宗教は日本ではないんですよ。

○国総研

―― 儒学ですね。学問ですね。

○梅棹

―― 学問としては入った。それはヨーロッパでラテン語を勉強したみたいなものです。

○国総研

―― われわれにとっての漢文というのはそうかもしれません。

○梅棹

―― 日本人にとっての漢文は、ヨーロッパ人にとってのラテン語です。

○国総研

―― そんな感じがしますね。

10. 西欧は新世界に進出して、内部崩壊をまねがれた

(1) 将来人口減少

○国総研

―― 明治になってエネルギーとか人口とか食糧といったものは飛躍的に増えます。このことから、明治以降に日本の文明が急激に発達したみたいに誤解している人が多いのではないかと思います。確かに、追いつけ追い越せみたいな目標があった方がいいんでしょうけど、あまりにも数字を追いかけて、今、そのことの歪みがきているのではないかと感じたりしているのですが、いかがでしょうか。

○梅棹

―― 明治時代に人口は随分増えましたな。ですけど、やっぱり物量はこなさなければならんでしよう。確かにおっしゃるとおりに、明治維新の直後は、日本の人口が約 4,000 万ですね。それから 1 世紀ほどの間に 1 億 2,000 万と 3 倍になった。その需要に追いつかなければならん。相当しんどい仕事をやってきたものだと思いうんですよ。全国にわたって、とにかくすべて 3 倍にふくらまさなければならんわけですからね。それはしんどいことでしたけれど、まあうまくいった方じゃないですか。戦争をやったことは馬鹿げている。戦争さえやらなかったら、本当にもっといい社会になったと思いますな。

○国総研

―― 多分 2050 年になると、1 億 2,000 万が 7,000 万か 8,000 万になるんじゃないかといわれています。そうするとちょうどいいかもしれませんね。

○梅棹

―― そうかもしれません。フランスがたどった道でしょう。フランスは大分減っていますな。先進国はそうなるんじゃないですか。ヨーロッパは新世界というものがあつたために、あれで内部崩壊からまぬがれることができたんです。日本に新世界があるか、今後あり得るのか。全くないわけではないと思うんですけど、しかし、北アメリカみたいに非常にいい土地はもうありませんから、これは内部システムで対抗せんならん。

（２）オーストラリアは希望の地かもしれない

○国総研

―― 満州国で失敗しておりますし。

○梅棹

―― 満州はそのつもりやった。これは大失敗。そもそも北海道がそうやったんです。北海道はヨーロッパにおけるアメリカであつたんですよ。ただ、規模が小さかったので、それほどの救いにはならなかったんです。アイヌは立場としてはアメリカインディアンなんです。同じ立場に置かれていた。大陸ではろくなことは起こりません。私は、日本が大陸に手を出すのはやめなさいと言うてたんです。大陸に手を出すことはやめよう。逆に海へ出ていくことを考えた方がいいんじゃないですか。

私は前からオーストラリアは希望の地ではないかと思っています。今さら農業移民というわけにいかないでしょう。私は JICA の人と一緒にオーストラリアを 2 度歩いているんです。2 周したんです。まだまだ余地があります。農業移民はもう余り見込みはないですけど、逆にいろんな企業移民をやったらどうか。会社ごと向こうへ入植するわけです。これは受け入れますよ。技術集団ですから。技術集団として会社ごと向こうへ持っていく。かなり余地があるように私は見ているんですけどね。今、大分行っています。工業段階のものとしては、自動車が大分行っています。オーストラリアでは、日本製の車が断然いいというわけです。ヨーロッパやアメリカのものより非常に人気が高いんです。新聞広告で、100 % 日本製、タイヤの中の空気まで日本製というのがありました。

―― （笑）。

そういう新聞広告を出していたです。オーストラリアは企業移民をまだまだ受け入れる可能性がありますな。一時は白豪主義といって、ヨーロッパ人、白人だけしか受け入れていませんでした。どうということかという、あれは中国移民を排斥する。中国人が入ってくるのを嫌ったんです。今でもそうですけどね。日本の工業移民、企業移民は受け入れます。農業移民も入りましたけどね。米もかな

りできていますね。

あちこちで日本語教育が盛んです。第二外国語は日本語が非常に多いです。シドニーでうっかり日本語で向こうの悪口を言うていると、わかっているのがいっぱいいるんです。ニュージーランドもそうですね。将来どうなるかわかりませんがね。

ニューギニアの開拓は、今のところ手の付けようがないですけど、あるいは日本人の仕事として残されているのかもしれない。

11. 情報産業について

○梅棹

―― 最近では、映画とか、放送とか、情報産業組織は、どの程度まできっちりした近代契約社会の基本に従って組み立てられているのか。マスコミというか、情報産業は決して新しいものではないはずなんですがね。相当の歴史があって築き上げてきたはずですけどね、その辺はどうですか。

○国総研

―― 新聞の問題ということだと、柳田国男先生が昭和初期に書かれた中で、その当時でも中央の新聞は中央のことを一方的に発信しているだけで、隣の町が何をしているか全然わからないと。本当は隣の町が何をしているかの方が、そこに住んでいる人たちにとっては必要なのに、その情報は一つもくれない。だから、それぞれの地域のことは、その地域の人を考えなければいけないんだということが書かれた文章がございましたけれども、そういう意味から言うと、昭和初期から余り変わらないのかもしれないね。

○梅棹

―― そうですね。マスコミの体質かもしれませんが、私らは関西で、京都市で、現に大阪で生活しているわけです。関西から見ると、情報の流れが非常に悪いです。例えば、東京ジャーナリズムというのは東京のことしか見ていない。どうしてですかね。関西のことは全然見ない。私は東京ローカルリズムと言っているんです。本当にローカルでしかない。

○国総研

―― 本当の意味での取材を余りしなくなったんじゃないでしょうか。

○梅棹

―― そうですね。私は国立民族学博物館の館長を20年やったんですけども、当初からマスコミの人たちを集めて記者懇談会を定期的に行ってきたんです。こちらから一方的にしゃべっているのを向こうがノートするだけで、記者の方から何も言わない。本当に驚きました。私の弟子にも何人もジャーナリストがおりまして、ジャーナリズムのことをよく聞く機会があるんですが、こういうことを言うてました。インド駐在の朝日の支局長をしていた男ですけども、インド人の新聞記者を黙らせるのは至難の業だ。しかし、日本人の記者にものを言わすのはもっと難しい。

―― (笑)。

本当にそうなんです。何にも質問しないんだ。こっちでちゃんと文案をつくって渡さないと新聞に書かない。不思議な集団です。記者に集まってもらって自由にしゃべっていただくはずなんですけど、しゃべらない。時々、非常によくしゃべる人がいるんです。それはみんなに憎まれて叩かれる。ええかつこしやがってと。そういうことがあるようです。

おわりに

○国総研

―― 私たちが国土形成史ということで勉強しようということで考え始めた理由が、どうも歴史家の人たちは歴史は勉強しているけれども、社会資本というのが世の中のためにどういうふうに役立ってきたのかという部分が欠落しているのではないか、という問題意識があったからです。

○梅棹

―― そうですね。歴史家というのはそういうことを考えない。

○国総研

―― われわれがそれをやろうかなということで動き始めました。

○梅棹

―― やってください。私がやっているようなことは、歴史の加工業みたいなもの。その部品は歴史家が提供する。加工してわかるようにするのが私らの役だ。

○国総研

―― 私どもも先生の後をついていきたいと思います。

○梅棹

―― ちょっと違う角度から歴史を見直しておられるようですから。やってください。実際的な感覚は歴史家にはまったく欠けていますからね。歴史家というのは基本的に文献学なんです。文献を調べて、そこに何が書いてあるかを言うのが歴史家。そこから現実になにがあったかということは、歴史家の想像から外の話なんです。本当にそうですよ。だから、歴史家の歴史はそのまま鵜呑みはできない。しかし、この頃日本史の人たちはだいぶ変わってきました。昔と違うようになってきています。だいぶ物がわかるようになった。

○国総研

―― 長時間にわたって楽しいお話をたくさん聞かせていただいてありがとうございました。それでは、今後も、国土形成史の勉強を進めていきたいと考えておりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。本日は、本当にありがとうございました。

謝辞

梅棹忠夫先生には、お忙しい中、貴重なお時間をとっていただき、「日本文明と社会資本」についてお話しいただきました。この中で、今後、国土技術政策総合研究所が、国土形成史に関する研究を進めるにあたりまして参考となる貴重なご指摘、ご意見等をいただきました。また、本資料を作成するにあたりましては、内容の修正、校正等、多大なご協力をいただきました。

梅棹資料室 三原喜久子様には、梅棹忠夫先生にお話をうかがったり、本資料を作成するにあたりましての事務作業に多大なご協力をいただきました。

ここに、厚くお礼申し上げます。

梅棹忠夫先生の紹介

梅棹忠夫（うめさお ただお）

1920 年 6 月 13 日 京都市生まれ 理学博士

国立民族学博物館顧問

財団法人千里文化財団会長

専攻：民族学、比較文明学

○略 歴

1943 年 9 月：京都大学理学部卒業

1949 年 4 月：大阪市立大学理工学部助教授（～ 1965 年 7 月）

1961 年 9 月：理学博士

1965 年 8 月：京都大学人文科学研究所助教授（～ 1969 年 3 月）

1969 年 4 月：京都大学人文科学研究所教授（～ 1974 年 3 月）

1974 年 6 月：国立民族学博物館館長（～ 1993 年 3 月）

1983 年 11 月：財団法人千里文化財団会長

1988 年 1 月：朝日賞

1988 年 4 月：フランス共和国パルム・アカデミーク勲章コマンドール章

1988 年 5 月：紫綬褒章

1990 年 10 月：国際交流基金賞

1991 年 11 月：文化功労者

1993 年 4 月：国立民族学博物館顧問、国立民族学博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授

1994 年 11 月：文化勲章

1996 年 1 月：京都大学名誉教授

1999 年 11 月：勲一等瑞宝章

○主な著書

1956 年：『モゴール族探検記』（岩波書店）

1964 年：『東南アジア紀行』（中央公論社）

1965 年：『サバンナの記録』（朝日新聞社）

1967 年：『文明の生態史観』（中央公論社）

1969 年：『知的生産の技術』（岩波書店）

1974 年：『地球時代の日本人』（中央公論社）

1976 年：『狩猟と遊牧の世界』（講談社）

1986 年：『日本とは何か ― 近代日本文明の形成と発展』（日本放送出版協会）

1988 年：『情報の文明学』（中央公論社）

1989-94 年：『梅棹忠夫著作集』（全 22 巻 別巻 1）（中央公論社）

2000 年：『近代世界における日本文明 比較文明学序説』（中央公論新社）

2002 年：『行為と妄想 ― わたしの履歴書』（中央公論新社）